

尾張國地名考第二册

春日井郡之部

津田美和助正生纂集

春日部郡

中古は春日部と書しを今春日井と呼有は轉聲なるべし延喜民部式和名類集等に春部と書たるは省略字の一格なり今は取がたし【伊藤祐吉曰】朝廷にては省きて春部の二字を書せたまひしも本國の方にては春日部と三を用ひて通用し來れる事なるべし

此郡は東西凡七里半南北三里東は美濃國及三河の國に界し南は愛知郡に隣る西は中島郡に至り北は丹羽郡に隣る此内東南の方は往昔の山田の郡の地なり

春日部の名義明白ならず

【考證】河内國春日部村は佛工春日が卜居より名付といふ武藏國に柏壁の驛あり姓氏錄未定雜姓の部に云く春日部の村主は津速魂命の後也と見へまた左京皇別大春日の朝臣の條に天帶彦國押人命の裔孫家に千金をかさね糟を委て堵とす仁徳天皇其家に隨幸し玉ひ詔して糟垣の臣と號たまふ改めて

春日部臣と書とも見へたり【正生考】おぼつかなりける
山田の郡

今はなし【野の部茂富曰】應永三十一年足利義量將軍の時山田郡あり【山
本格安曰】後世足利の臣斯波氏領國の時山田の郡を停て春日井郡に合せて
一郡と爲といふ【正生考】春日井郡のみに合せたるにあらず愛知郡にも入た
る所ありしかして愛知郡の東南の村々
をば知多郡にも合せられたり【松平君山曰】今山田の庄と遺稱せる村
々は多分は是往古の山田郡なり

大曾根オホソネ曾根ソネ 支村一 新出来町

此村今は御城下より陌續マツツギとなる世俗大曾根口といふ名古屋の良の出口也木
曾街道大井驛へゆくを下街道といふ岐より右の方へ行は瀬戸街道なり
曾根は假名書なり【橋守部曰】曾根と呼地名國々に多かる何れも城下市場
など一里の後乾良等の隅なる地をいふを見れば脊根の義にて根は根本など
いふに等しく一里に近付たるよし也予がもと住し下總國葛飾の郡に中曾根
川曾根などいふあり皆本郷の春合なる地也播磨の曾根和泉の曾根なども亦
しかり

【延喜式】山田の郡片山神社【本國帳】從三位片山天神

【澁川弘美曰】大曾根八幡の社はなり社司は慶徳氏といふ此宮地は往昔の山
田郡片山天神にして祭神大伴
武日命もとは大曾根村の産神なりしに元祿中瑞龍院公
の御時是何の神乎と御尋ありしに里人しらず候と答ふよりて吉見氏へ御尋
ありければ傍題そばだてに八幡宮と申上しかば御造營ありて大曾根御屋敷方の守護
神に祭り玉へり本地堂の觀世音も西の方へ引て關貞寺といふ禪刹ぜんせきに成さて
村民は八幡御造營の嚴重を恐れて夫より此かた同所天道宮を本居に定むこ
なり其後杉村の藏王の社八片山の社號を拾ひて式内の神社とせるものは末
世の人情憎むべし

【正生考】大曾根八幡宮鎮座の年月詳ならず國君瑞龍公元祿八年八月本社瑞
籬等を造替玉ひ御正體は江戸高田の穴八幡を摸し玉ふ又山田即齋いさといへる
を江戸に下し穴八幡の神樂拍子を習ひ取しめ愛の神主慶徳源之丞直規に教
へさせ玉ひしとそこをもて再按に澁川氏藏王の神主が片山の名を奪ひし
とのみ心得て常に不快に思はれて強て大曾根を片山にせられしなるべし片
山神社ば七尾永正寺の天神ならんもしるべからず

上野村ウエノ内ウチに同名あり云也

【澁川弘美曰】舊名狩津村とて北の方の田並に村落あり後に平山へ移りて上

野とよぶ【或人曰】寛永の頃鍋鑄職の水野太郎左衛門が先祖の者此處に住たりし故に鍋屋の名あり

大幸村

地名詳ならず此村矢田川の端に近しされば正字大河斂又醍醐森といふも程近きにありといへば醍醐の轉聲斂また一考あり隣村上野の舊名を狩津と呼しに對て山の幸大也といふ意をもて從來大幸といひしを後世戰國このかた字音に呼たるもしるべからず猶訂すべし

矢田村 大湖〇知多郡に原名あり

正字谷田なるべし再按に此村山田村に南北ならぶされば耶陀とは山田の中略にて北を山田と呼南耶田と呼分たるもしるべからず此例他所にもある事也中島郡小原村の支に正源といへるはもと小原なるを字音に呼分たるなりとす

矢田川

【近藤利昌曰】水源は米野木村の境内の三ヶ峰より出て赤津瀬戸などの諸山よりも出合て流れ落

守山村 海東郡に同名あり

支村四 大門 木ヶ崎 秦江 宮司島

【或人曰】續紀に和同三年正月初て守山戸を充て諸山の木を伐ことを禁むと

あれば爰も古へ山守を置れたる所歟【近藤利昌曰】支村秦江の方却て古たり今の町の正西に八幡宮あり昔は此宮の乾に一むらありしが水野定光寺を御建立ありて後村民漸々街道の方へ家を移して僅に十戸餘も残りたりしが是も寛政中に今の所へ家居を移して舊地は悉く畠となる〇支村大門は長母寺の大門通りなればいふ木ヶ崎は長母寺の一山を呼とぞ秦江はむかし八幡宮の社人秦掃部大夫の住し所故に呼にや宮司はもと小幡村の屬村なりしが後世守山に屬たるなるべし是は尾張戸天神の宮司某のト居地ゆへに宮司島の名ある事疑ひなしざるを村民宮司は八幡の社人といふものは秦江島と紛ひたる成べし

靈鷲山長母寺寺家二院

京東福寺の末寺也【相傳曰】往昔大門より地つゞきなりしが明和四年丁亥七月大水に大門通を押し流せしより切て矢田川原の真中となる世俗木ヶ崎とよぶ【一書曰】此寺初名は龜鏡山桃尾寺とて天台宗の古刹なり無住和尚大國師一沙石集の作者の時靈鷲山長母禪寺と改られき山田左衛門重忠の母を長母院大叟純鏡と申に因と也

尊海東路の記に

もり山といふ所に旅寝せしがいとさふければ

尊海

もり山の里の名にあふ宿かれは小夜もすからに袖そしくるよ

此歌は尊海法印北山名の龍泉寺にとまりし後この長母寺へも訪れたる時の

詠歌なるべし

金屋坊村

金谷の地名諸國におぼし鐵屋とは鍋釜を鑄る家をいふ【近藤利昌曰】長母

寺の東洞に殺たる邊にむかし鑄物爲の住けるにやいまも金谷とよべり相傳

ふ近世長母寺より今の地に一字を立てこれを金谷坊とよぶ遂に村名となる

といふ【正生考】されば俗語の異名に出る村名なり

幸心村

【近藤利昌曰】もとは守山の支なるべし【正生考】或人の詞にむかし猿田彦

神土をもて龜竈を作り初玉へるより此命を幸神といふ後世鎌倉以來字音に

幸神とも呼より或は庚申又は荒神と紛へる事ありといへり是によりて思ふ

に此村の常雲寺宗に祭る庚申堂ももとは幸神なるを戰國以來庚申に誤るよ

りいよ／＼今は庚申堂と轉化たるなるべし地名の正字は幸神村なるべし或

人の説に庚申堂あるより基きて幸心村といへるは道理に聞へながら非言な

大永寺村

【里老曰】此村の舊名は小幡村の内宮地村と呼で今の宮司島守山を雙びて同

郷なりしを後に小幡原の大永寺を今の地に移し建たるより改て大永寺村と

呼といふ一説には小幡原山の大永寺天正年中に焼失せしを其後爰に移して

建たる後に川村の村民寺の東に漸々家を移して遂に大永寺村とよぶともい

ふ【瀧川弘美曰】大永寺の古鐘銘に尾張國山田郡宮地村壽昌山大永寺とあ

りつるを當寺十八世の僧是を不審おもひて其鐘を鑄直し古銘をも潰して新

銘に書替たるは鹿忽惜むべしといふべし古鐘に山田郡宮地村とありて今も【正生

考】大森垣外川村牛枚もみな引括局は村名も郡名も離隔あればにやて舊名を宮地村といひしもしるべから

ず猶訂べし

壽昌山大永寺曹洞宗丹波國村

美濃國伊尼の領主岡田の某代々の菩提所也門内に東向に天満宮あり庫裏の

東に辨財天の堂あり寺領六石七斗八升二合今は此高のみありて現住持瑞道曰天

正火災の後此寺に記録書はなし然るに當寺十五世の鐵船和尚は文才ある仁

にて掛尾岡田家の記録をかりて其に因て作られたる當寺の傳記一冊ありて
 て投じて見せらる其記録を略して爰に舉
 山田庄小壘田邑後作小幡建久八年丁巳三月菱野の領主山田左衛門尉重忠ぬ
 し先考山田の太郎重滿の十七回忌追福の爲に初て小幡の郷に一字を建て壽
 昌院と號く天台宗也永正十七年兵火に燒失ぬ一説に比叡山と木末の争論の事に付て寺中興上としレふ ○翌大
 永元年山田氏の末裔岡田與九郎重頼二たび小幡原に堂を建改めて壽昌山大
 永寺と名づけ宗旨も禪宗に更て柏悅和尙を開山とし第一世と定む大永二年
 重頼城を小幡に築て住居とす又宮地村の内田地若干をもて寺産に充爰をも
 て寺院福祐也然るに天正十二年岡田長門守の時織田信雄の爲に城を拔れ大
 永寺も並に火災にあひて再灰燼となり寺産も悉く滅却こよをもて當寺七世
 八世の二代は年月分明ならず檀家も定らずたゞ飯依の志によりて引導燒香
 あるのみ天正火災の後は中絶せしが七世八世の住持は草庵を結びて假かに暮せしが詳ならず 九世の僧玄的和尙に至て元和
 岡田伊勢守重經ぬし伊尾より今の地に再三建立是より後當村の事等記録も
 あり又菅神自畫費の像を寄附せり○寛文五年天下始て宗門改ありて寺檀の
 差別過去帳も出来是より後は何事も明白になると見ゆ
 天神の森大永寺の西にあり

大森海道村登加潤音

今は社頭なし小幡村の條下に悉しく辨説す
 正字大森垣外村也俗文字改むべしかきとをかいとよ呼はきの字を韻にまわ
 すなり○此村は小幡と大永寺村との其間にあり往昔大森村より開墾せしな
 るべし

牛收村
 川村 支村一 圖書池
 徒士川條の端にあり此故に呼なるべし支村圖書池の地名いまだ考へ得ず
 小幡村波瀾音

【澁川弘美曰】小畑はもと尾張戸と約るにやと思ひ居しに一日木ヶ崎無住國
 師の行狀記をよむに果して然有を見て年頃の疑念をはらしたり附言澁波多の地名は他國にありて小畑小俣など昔り但し姿と萬さ常に通ひて差別なし小畑は正字に【正生考】小治田
 尾張戸小幡の語は實は同事にてたちつてどの通ひ也尾張部さあるまたり字を
 除く事はすべてラリルレロの五聲は除もし加へもして呼ここ皇國の典格也
 【里老曰】今の街道條なる聚落は小幡原といふ所にもと平山なり慶安年中
 水野定光寺御建立の後道も替り諸人往來も蕃きにつきて村民漸々に街道の

方へ引移りたど新地にて舊地は此平山の北麓舊道の北の邊をいふといへり
【正生考】川村牛牧大森垣外大永寺宮地島幸神守山金谷坊等の村々は舊尾張
戸の一郷なるべし

【附言】小幡村古城跡といふ處あり東西百十間南北六十間といふ其南に本
町といふ畔名あり又町屋敷と呼所には民家あり是等の處は大永二年岡田
與九郎重頼の居城よりの名殘なるべし

【續日本紀曰】稱徳女帝の神護慶雲二年十二月甲子尾張國山田郡の人從六位
下小治田連樂等八人に姓を尾張の宿禰と賜とあるものは此小幡村歟又は水
野村の内なるべし但し尾張姓の人は熱田を本とすれど山田の郡に分派てト
居のありたるは小幡と水野より外にさす所なし後の君子なを考ふべし

【延喜式】山田郡尾張戸神社【本國帳】從三位尾張戸天神【瀧川弘美曰】此
神社戰國以來其所在を亡失へり按に小幡村今の白山宮其部歟社人長谷川氏
司之張州府志撰書の時小幡村の三所明神は白山愛宕八幡を祀るとあり今は
愛宕は別に社地ありてこの白山の攝社は八幡と天神とあり此天神はもと牛牧村
を修驗堂にして錢八百文に民家へ買
入とせしを買取て茲に攝社とす也此天神若くは往昔の尾張戸天神もしるべか
らす猶訂正べしと申されき【正生考】謹て考に尾張戸天神の舊地は今の大

永寺の西に天神の森とて三百坪ばかりなる松山大永寺の
地なりある則是なるべし
今は社頭なし大樹の伐株あり往昔は大永寺の邊を宮地村と呼たりしと也宮
地村に少し殘るされ共今寺にたいて天神の森は全く菅原神の事と思はれきい
かにといふに其傳記に御治世の後寛永二年岡田伊勢守重經京都女院の御所
造營の監事を勤められし時北野天満宮を信仰し社僧松梅院より菅公自筆の
畫像を請得て持歸り拜敬なせしかども家に怪しき事再々あるを惶れて遂に
香花の大永禪寺に寄附せられたるよし傳來憶にして今門内に現然と畫像天
神の宮もあればなりさて天神の森も住僧其菅原天神を混同にして右傳説の
末に明暦萬治の間一たび畫像紛失して尋覓といへども更に獲る事なし一日
天神の森の社内において畫像を探得たり夫より此かた永久齋奉ると書ける
は例の牽合附會なるべしそも、天神の森は本國帳にいへる尾張戸天神の
森にて尤宮地村の名殘も著明近世寛永二年岡田重經ぬしの受得られたる年
曆より舊くありつる事今松の伐株を見てもたしははからる爰をもて天神の森
と寺内の天神とは別々なる事をしりぬ

【附言】【現住瑞道曰】寛政九年當寺十九世の和尚禪明の時此庫裏を修復せ
むとて官府に願ひて天神の森の大木兩度に三十八本を伐取或は用材にし又

は活代なして既作事にかよられたり扱神罰の丁るまじき事かは丁れりども
／＼手斧始の日より第五に當る日禪明は故なくして頓死せらる又其松の根
を掘採し人夫どもはかの／＼疫病を煩ひてみな／＼死たりさて和尙なくな
りたるに付て法類十二ヶ寺の内五ヶ寺の僧侶此寺に敵對してあらぬ訴訟
を金寺内の騒亂凶事連綿六ヶ年の間無住荒廢困窮に及びたりしを予眼前視
る所なり是偏に天神の神罰なりと予はしりぬ然れども人夫の病死は一時に
あらで疫災永引漸々に死したれば村民はそれと慮付さる族もありきと語さ
れたり【正生考】右はまさしく尾張戸天神の神罰なるべし然るを瑞道和尚
はじめいづれも菅原神の神罰と思ひたられき

大森村海西郡に同名あり

地名正字なるべし

名物 葉沓 大森寺浄土宗西派 京智恵院末 寺領三百石

むかしはわはもりでらと呼しを今は字音によべり

印 塙村 支村二 庄中 廻問

正字齋庭の義也齋場をいむばと呼は言便也謹考に此村中古の時新嘗祭のト

定抜穂の齋場いみまとされるより呼初たる村名也【天武紀云】新嘗の爲に國郡を
占なふに悠忌は則尾張國山田郡悠忌も主基りみな假名書也由貴はい主基は則丹波
國河沙郡本居氏曰主基は親の曾岐同言並にト御食にあへりとあるものは正しく
此地をいふべし【加茂真淵曰】齋場は御田を植て守斯て春までの齋殿をつ
くる歌に清き御田屋ともよめり【公事根元註云】新嘗祭は霜月中の卯の日
を以て大極殿の前に更に更に神殿を構へ天皇御手自新穀を天神地祇に供玉ふを
いふト御食の神供田は六段なり抜穂は今の田疇に同じ往古は手もて採採し
故にいふと予【一書曰】延喜以前は占をもて國郡を定めしが其後由貴料は
近江國須岐料は丹波國に定まりてより占定は止にきとみゆ【或人曰】今は
御代の始の大嘗會は主にせられて年毎の新嘗會は祭事かろく成たりといへ
り【延喜大政官式】凡踐祚の初有大嘗會七月以前即位者當年行事八月以
後明年行事大臣奉勅召神祇官ト定ニキスキ國郡ヲ奏可訖即下知依例准擬
又定檢校行事八月遣使於兩國ト拔穂田及齋場雜色人令行事【正生考】
諸國に相場とよぶ地名あり相場は墳字なり三河國渥美郡に饗庭村と書有言
便にあいばと呼とも舊はあへばなりアイハもむかし神に奉る御饗みかへに出る名
にや齋場いみまにすこしく似たり

【延喜式】山田郡那澁川神社【本國帳】從三位澁川天神
印場村八座明神の地齋場の跡なるべし

社人淺見氏

【里考曰】社邊の田の畔名に祖父川とよぶ處あり【或人曰】曾父川は澁川なるべし【社傳曰】澁川天神は神祇官の八座の神を祭る

【因誌】【契沖曰】筑前國御笠郡に次田の里あり次を古語に須岐といふ大嘗會の主基も此義也然思主基の須岐を先解に須岐は攝津國三島郡なる吹田村も次田村なるべきを續後撰集よりこなたの歌書などにあやまり次と吹と字形も似たれば吹の音と意得て吹田と書更たるは古語に聞きゆゑなるべし以上和【正生考】しかり伊勢國三重の郡に水澤村あり越後國蒲原郡に水原といふ町あり同郡魚沼郡に水澤村あり陸奥の國膽澤の郡にも水澤あり先に予是等の地名を怪しむ事既に十餘年後に契沖阿闍梨の次田の釋言を見て味間を開き水の字は皆次の語を填たるにて須伊とよぶは須岐の韻なることをさとりぬ猶よく訂しおもふに伊勢の水澤村は長澤村に次越後の水澤は赤澤鹽澤等の村に次陸奥の水澤は前澤村に次有さて攝津の吹田は金田村舊はかなだにに次の謂なるべし越後の水原も其邊何原とかいふ所ありしか果と忘れたりき

良福寺陸奥

【松平君山曰】此寺に靈水あり養老泉と名づく山下にありて常に汲て用水とす衆僧曰人増ば此水隨て倍候と世諺にいふ人増ば水増とは蓋し此處に基くもの歟と申されき

猪越原村波瀾

愛知郡猪子石村と隣れる地にて猪子石より出たる原新田なれば名づく

稻葉村中島郡海東郡

支村一 北山

井田村多國

瀬戸川村加瀨

瀬戸の方より流るゝ川下に方位

狩宿村加利

支村三 南島 北島 伊勢濱

地名詳ならず或は後世鹿狩の時こゝに假舎を立て遂に民居と成たるにや三河國播磨の郡に狩宿村あり

美濃池村

地名詳ならず疑らくは美濃の別の轉聲てみのゝいけとよふにもあらん歟

【考證】古事記垂仁の卷に大中津彦命は尾張の國の三野別等が上祖なりと

あればなり猶訂すべし

新居村同名あり

支村五

原山

大道島

八瀬板

大久手

向島

【村民曰】此村もとは志段見村の境内にて渺茫たる廣野なりしが康安元年に志淡の住人水野又太郎良春といふ人此野を開發して城を築く此故に新居と名付今も水野氏の末葉金左衛門といふ者此村にすむ

朱書

良春の男福島正則に仕へ後瀬古村の郷士たり水野正信曰良春の孫正

利敬公に奉仕子孫五家伴左衛門與兵衛彦左衛門文左衛門十之右衛門

又大道寺家に二人仕

柳井の水

【箕浦賢屯】新居村洞光院宗源本堂の坤方にある泉なり是は寶永の頃此寺に止水といふ住僧ありしがいたくこの泉を愛て名付たるとなん此僧の著述柳井の記といふ文章の中に

止

水

すみ捨て我やなからん後もなほ柳井の清水かけを濁すな
など見へたり此水今も清し

今

村同名あり多し故

支村

横山

【松平君山曰】舊名を横山といひしと也【箕浦賢屯曰】横山は今却て支村の名にのこる【正生考】印場村より東へ瀬戸までむかしは村里なし近世其間に新居と今村との二村出来たりされば舊名横山といふことも只山の名にして村名にはあるまじき意地す

瀬戸村

登清音

【神野翁曰】瀬戸は正字陶所の義なるべし周惠の反勢戸は所也陶器を焼ところをさして勢戸とよぶことなるべしと申されき【正生考】此解確言也和名抄に山田の郡主惠の郷とあり又飛驒の國人の談に卑駄國大野郡山田村は古へより陶器を焼ところなり又三福寺村不詳音にても近來陶器を製出此二ヶ村ともに世俗村名を呼すして皆瀬戸々々といふ是勢戸はたのづから陶所の約る其證なり

【附言】日本釋名曰瀬戸とは狹る所也四方に山ありて海のせまき所なり又海ならねども山間の狭き所をも迫戸といふ、とあるものは海路なる瀬戸の事なり安藝國かんの瀬戸相模國瀬戸の三島などのことなりこよをもて瀬戸に二義あるをしるべし

名物 陶物

【尾張人物志】相傳て云順徳院の御宇加藤四郎左衛門春景又後醍醐といふ者嘗て道元和尚に従ひて宋國にわたり土器流業の製法を習ひ歸國の後瀬戸赤津の地にわいて是を始む夫より以來藥流くすりながしの日本製を世人瀬戸物と總名せり【或人曰】加藤四郎が焼たる時はいまだ極品ならず其後年々を経て漸々上製となりぬ寛政年間に至りて陶工こゝに極る就中瑠璃藥は西土しよどの古製の右に出といふ

【延喜式】山田の郡深川神社【本國帳】從三位深川天神
集説云瀬戸村八王子の社なるべし

社人 二の宮氏

【里老曰】今も深川と呼地あり

赤津村豆田 支村三 山路 白阪 北竈

【松平君山曰】いにしへ飽津とも書有【正生考】地名未考或は赤土の下略に出る歟

大龍山雲興寺源宗

白阪村にあり 寺家一軒 寺田秋米三十九石一斗

品野村上中下の三村あり 支村二 鳥原中品野の支 天澤上品野の支をり此村今は美濃に入

品は借字なり科木かきのおほきより呼て科野といふなるべし科木は楮かたとも紙草ともいふなり信濃の國號に同じかるべし【近藤利昌曰】舊名を桑下村と呼たりと云

【山中寛紀曰】雨澤あめは今も美濃國岩村領梯野村の支に屬有相傳へて雨澤は永祿年中上科野村より開田すといふ寛紀謹で按に慶長年中既に取落に成たる事と見へていつの間にか岩村領となれり一記に文祿十四年までは岩村の城主丹羽壹岐守領之此守掃部三草へ所管あり同十五年より後は松平能登守殿の領分とあれば此村丹羽氏の時既に岩村領也扱いま三國峠とよぶ所は昔は所替りて一谷此方也舊は三國峠は今より天の方なる丸山の所なりこと古への三石今猶鼎足のごとくに立有南は三河國加茂郡市の野村の地境北は美濃美濃の國土岐郡梯野村の地境西は本國山田の郡今は春日井郡科野村の境内にて水落もたのく三ヶ國へ分れ落て三國峠といふも實言割とぞおぼゆ然るに後世雨澤は岩村領へ紛れ込るより美濃の後人三國峠を今の所へ轉改まがたれば谷も違ひて水落も實は美濃尾張の二ヶ國にかゝらず歎はしき事ならずやといへり【正生考】ねがわくは岩村へ替地を造されて雨澤をば再び本國へ屬玉ひたき事なり

かして雨澤は正字天澤の轉語也越後の國荊田郡に天ヶ澤村あり奥生水の油の出る所也【山中氏曰】上科野片草の邊は本國の内にて東へ張出したる事隨一の所なり三州岡崎の眞北よりは遙に東へ越たる地なり片草より内津は西北に當るなり

白岩村

地名正字なるべし

片草村久清

村名いまだ考へず○白岩片草も舊品野の一郷なるべし

秦川村多加並國首上 支村 尾呂下秦川

一に半田川とも書有出雲風土記に伯太川と書たる地名あり半田も伯太も假名なり正字詳ならず或は葉垂川の下略歟一説に秦は檜皮楨皮などいふ波太

にて木の皮の事なりともいへりさるときは秦皮の義歟猶考ふべし

杣掛村愛知郡に同名あり 支村 半の木

【箕浦賢屯曰】舊は水野の一郷なり【正生考】支村半の木は正木榛木の轉聲なるべし

應夢山定光寺末○臨濟 寺家六軒 寺田三百石 名物 山椒くらま

源の光友公の御歌の中に

詞書あるどしの秋の末水野の山へ物したりけるときよみける歌ども

鹿のねに虫のこゑくとりそへて哀をつくす秋の山さど

山さどはしはし假寝も物うきにまして小鹿の夕くれのこゑ

こゑろある人に見せはや古さこの水野の山の秋のゆふへを

山田もるしつか別はす稻の下に鳴からす虫の聲のあはれさ

水野村上中下の三村あり 支村六 園洞 餘床洞並に上水野の支なり 稻込 片落水野支中 岩割瀬

正字水沼なり古言に沼をぬといひ野も亦ぬといふより誤れり

【延喜式】山田の郡金神社【本國帳】從三位小金天神

集説云上水野村小金山あり【正生考】謹接奉るに小金明神の社地は戰國以來佛界となりて今の威應寺の一山是なり此寺もさは宮寺なりけん後世檀家も多く申も惶けれど墓所の石塔も數く見へたり惜むべし一山かく穢地となりて小金は只山號に残れる事を扱小金山のうしろに一谷を隔て山洞を少し穿て其所々に小社を建て白山姫を祭る是を今小金神社といふ再考に舊地の亡たるは悲しけれど又清淨なる地に更座たまふも則神慮ならんと貴くかば

【附言】内山真龍曰遠江國引佐郡瀧澤村多都佐に大日堂あり式内太伎神社は今なし是は太伎神社廢れて堂となる歟又佐野郡今はこの淡か嶽の東山村にいま觀音堂あり是も式内阿波々の神社の一變なりといへり【正生考】小金山感應寺も此たぐひなるべし

【廷喜式】山田郡尾張神社【本國帳】從三位尾張天神

【正生考】下水野尾張山の山上にあり集段に山田郡尾張神社を尊此神社の鎮座がゆゑに尾張山と呼なり土人又當國山ともよべるは異名なり東谷と書ものは非なり此山は下水野の西の果りにあ

【天野信景曰】祭神天の香語山命 社人 菊田氏

【松平君山曰】尾張山は天の火明命を祀る又倭武尊建稻田命を配祀るといふ明は父神香語山は子神なれば【近藤利昌曰】祭神尾張姓の先祖なるが故に熱田の大宮司は一代に一度づゝ此山へ參出らるゝ事なるべし

【考證】天野信景曰尾張國は天の香語山の命の裔國造となれり此故に此神の御末なる本居の神社おびたゞし三河遠江駿河は宇萬志麻治の命の後裔國造となれり依て彼神の屬族なる本居の神社おほかり以上【本居宣長

曰香語山の命の御父は火明命なり火明命は天照大神の御末にて天孫也また味志麻治命の父は饒速日命なり饒速日は神武帝の時出現座神にて天神なり

萬葉八に尾張連の歌二首

關名

春山のさきの手鳥里に若菜つむ妹かしら紐みらくしよしも」
うちなひく春來るらし山のまの遠き木ぬれの開ぬる見れば」
此歌萬葉にその名を關ぬといへど尾張の連は多くは熱田なればあつたの條に書加ふべきを忘れにたれば今こゝに追補なしつ

【尾陽雜記】尾張氏の末孫大宮司の崇敬ける故にいつの世よりかこゝをも熱田といふなるべし北麓に高倉寺村あり西麓に白鳥山もあり熱田を表せる事眼前なり土民は熱田の奥の院也ともいへりまた爰に熱田の社人の控たる神地あり禰空も由來はしらすして只持傳へたるばかり也【君山翁曰】寛文五年瑞龍公の御時二の攝社及佛堂を創建至へり南社は伊弉諾尊北社は甕理媛命也其北の佛堂は藥師如來なり

高倉寺村一に高倉寺とも〇佐調音又清音にも呼

地名始は神名に起りて寺院の名と移り又村名となるにや此地尾張山の麓に

方位て玉野川を隔たり往昔此處に熱田の高倉明神を祀るといふ此故に高倉地とよぶ其神祠を守る神宮寺を後世に高倉寺天台宗といふ今は村名となる【里老曰】此邊すべて土中より岩木を掘出すわきて此村の境内に岩木はほし一穴を見付て利運あれば金三十兩にも五十兩にもなるといふ【正生考】岩木は眞の木にあらず按に硫黄の精土塊に凝滞て遂に木理の紋をなせるなり本草に石炭石煤など出たる物は也とぞ余岩木を掘たる跡を見るに平山に溝を掘たるがごとく其溝或は沈或は浮或は曲り或は直く深からずして大方は地面の上部を道有がごとく其長様限りなし伊勢國にては此を字仁といふとぞ【或人曰】世に扶桑木といふものは誠は木にあらず皆此岩木の極品をいふなりといへり

志段見村上中下の三村あり

志段美とよむべし志太舞美とよぶは非言なり假名書の地名なり【和名類聚】山田の郡志談郷根本談を語【正生考】志談も借字なり此地は尾張山の峰より瀝る水の幅廣く落る所也此故に正字瀝水の義なり垂水と呼に同じ

【因言】三河の國加茂の郡に下利村あり是も雨垂のいひなるべし

【正生考】上志太水に子守勝手の宮あり本居氏の説にこもりは舊水分の轉聲

にして大和の國芳野にいます水分神社は中昔の六帖枕冊子等には御子守の神と訛り今は單に子守と申て子孫の榮を祈る神と成玉へりと菅笠日記に見ゆされば水分の神は水神にましませば志太水村に祀る事所稱なるべし夫に就て按に本國帳集説に山田の郡正四位下實々天神一本作美公是を美々と讀て春日井郡間々村などいへる郡堺も地理も違ひて非なり是は美々も美公も並に分字寫し違にて實分天神の誤ならん歎されども水分の水に實字を下す例もなければ疑ひを残して後の君子の明斷を俟

中志太水に諏訪の原の地名あり是は尾張山より雨水所々に泥て小さき湖水をなせるによりて也湖水を湖廻といひ其邊の廣野を原といふことゝに諏訪明神を祀る近年は諏訪の原に民戸も出來たり

足振村不測

地名未考蓋し足振は足震の謂歟轟といふ地名諸國にあり

久木村紀清

地名詳ならず或は久木正字にや日本紀景行の卷に歷木を比佐木と讀久木は埋木也といへど是又木にはあるべからず則岩木の事なるべし○或は正字桶前ともおもへど否なり

【考證】三河の國加茂の郡に久木村あり
大留村登瀛音○上下
の二村あり

【野部茂富曰】大留はもと大の目の轉聲なるべし

【延喜式】山田の郡大目神社【本國帳】從三位大目天神

【茂富曰】下大留村天神是なるべし 社家 小林氏

【正生考】明和年中松平君山翁の巡見の時は大留村に神明社社天王八幡神明天神社と二所二宮を書記られたり其後六十年を経て正生今巡拜せるに村の中央社家の西につゞきて神明の森あり本社にならびて天神の社頭あり攝社の小祠を尋るに天王稻荷秋葉辨天也といふ君山翁の書記と相違せり又村の西に小森の社地あるを天白の社といふ明和年間の天神社とは蓋し此天白の森をいふか蔭に接に天神の森を神明の森に遷奉て舊地の森を天白と更し歟六十年の間に轉變こと斯のことし末世の人情に出るもの歟後人猶考ふべし
神領村音調

地名初より字音なり中古の末より後世鎌倉以來の俗語とす【里老曰】此時往昔農人はなく只社家のみ七八戸許居寄て住たり依て神領村の名あり然るに足利の末に滅亡て年貢地に成といふ【正生考】むかし何れの神の神領な

りや今の三明神は天正年中に建立ともいふ眞野時綱は津島の社領なるよしをいひ君山翁は熱田の封戸なりといはれたれど共に詳ならず予は又水野の尾張天神歟又は大目天神の御神領なるべく考へたり

野田村多喜瀧音今清音○愛知郡中島郡に同名あり

村名正字なり多字濁りて呼べし今官府にて清音によふは愛知郡と呼ばわかつが爲なり

醫王山密藏院天台宗日光御門跡の末寺也 寺家六坊 寺領百三十七石七斗九升

慈明上人の開基本國天台宗の總本寺也末寺多し本國の内は勿論三河遠江駿

河美濃信濃飛騨伊勢播磨肥後等の國々に末寺ありと也
牛毛村計瀧音○愛知郡星崎に同名あり

地名正字なるかいまだしらす

堀之内村同名諸郡におほし

名栗村久瀧音

地名いまだしらす

櫻佐村

或は櫻澤櫻のさざの下略なるべし木曾街道賈川の驛と本山宿の間に櫻澤村あり

吉根村 支村一 河戸音加濁

【箕浦賢屯曰】吉根は正字桔梗村なるべし古今集物名を隠せる歌にキチカウと詠有然るに村民キッコノと呼より遂に桔の字の籍も省かり梗は則根と誤るなるべしされども稱呼は根はカウと引なり信濃國筑摩郡に桔梗が原あり今はキキヤウが原とよべり是に等しかるべし【正生考】箕浦氏妙解を得られたり今も彌生月のころは此地の山野に桔梗山コウキョウヤマの花など疎に咲生たり地名の基本を見る心地ぞする○或人此村むかしはよしね村ともいひたりしを後世字音に呼歟といへるは埒もなし

松洞山龍泉寺天台宗密藏 隆末寺なり 寺田三十九石餘

山上にあり本尊馬頭觀音は山下なる多羅々の淵より出現といふ又本堂のうしろの谷を椎が洞といふとぞ

【正誤】大和の國芳野郡に龍泉寺といふ山寺あり頗大山なり歌に龍の御山とよめり 雲はれぬ龍の御山の時鳥空をかけりて啼わたる哉 又 あま雲のさそひつれてや降るらむたつの御山の夕立の空 是等の歌共を尾張名勝記に引たるは誤なり

上條村海東郡に同名あり 支村一 上條原

後世鎌倉の頃に名付たる村名也初めより字音を用たり

【考證】拾芥抄田籍部に三十六町を一里とし六里を條とす但し里は西方より起りて東に行き條は北より起りて南に行き見わたる

下條村 支村二 下條原 津入通濁

關田村多濁

地名正字なるべし川水を塞入て田所へ引より呼初たるなるべし世紀世義清濁ともに物を塞留る意也

下津尾村

津は乃字の格なり尾に二義あり山の垂尾と岡となり此村下之岡にや猶考ふべし

中切村紀濁○同郡福徳村にも中切あり

此村下條中切と呼わかつ

松河戸村加濁音 止濁音 支村一 松河戸原

此村往昔は玉野川下流の端にありて松ある河戸也故に呼但し河戸は河門にて川口といふがごとし【和名類聚】春日部郡柏井郷今も松河戸中切下津尾下條上條の五ヶ村を柏井の庄五ヶ村といふ【尾張人物志云】敏達天皇の末

葉小野道風は此村の産なりと見ゆ今道風の屋敷跡といふあり【内山真龍曰】
世にいふ昔誰某の朝臣の塚也といひ或は産地宅地などいふものは多くは朝
臣其國の守に下り著て當時假住居せられし在所より遂に誤る事世上に多し
といへり

勝川村下加

勝は借字なり加知我波とは馮河ホウカの謂にして正字は徒士川村也【里老曰】徒
川瀬處山田は舊一郷なりともいふまた勝川の天満宮は舊丹羽加賀守陸奥國二本
屋敷の鎮守なりといひ傳ふ

【松平君山曰】東照宮長湫の軍役の時此所に至りて所の名を聞玉ひ大に悦び
則旗竿を切取玉へり夫より嘉例となりて勝川の旗竿と呼ぞ

【因書】東鑑に文治元年判官義經平家の一門を追討せられし時阿波の國勝
浦に至りて浦の名を聞て喜悅せられし事あり例よく相似たり

瀬古村 支村一 向瀬古

瀬古はかな書なりせば脊なりこは所なり脊戸に等しく地名においては裏向
をいふの詞也

【延喜式】山田の郡羊神社【本國帳】從三位羊天神

【正生考】瀬古村天神の宮なるべし

社 家 森 氏

瀬古辻もと一圓なるべし○辻と羊は假名も違へり仍ておもふに羊は正字に
して後世火辻と書誤り今亦辻村と呼にもあるべし

山田村

地名正字なり中古山田郡あり一郡の總名此里より起るなるべし

【延喜式】山田の郡山田神社【本國帳】從三位小口天神

【正生謹考】延喜式の判本山田を久しく小口に誤る二字共に板本の缺たる也
本國帳は古來寫本なれば延喜式に任せて又小口と寫誤るは並に誤りなり
野口歟などおもふは迷ひなり山田天神の宮は常高院眞言の東にあり往昔より
此村の本居とす攝社八幡然るに戰國以來社傳をうしなひていま菅原天神と仰
ぐは甚誤れり蓋し祭神は天の香語山命歟猶訂正べし

飯田村上下の二

【瀧川弘美曰】土人は下井田上井田とよべり【正生考】飯田正字なるべし飯
島飯田共信飯藏武藏飯室江近飯村三河飯沼國不飯尾國不などあり伊勢の郡名に飯野

飯高等もあり

杉村東中四の 支村一 出町

地名正字なり出町は愛知郡清水口の出崎につらく
名物 木綿

田幡村音調

地名神名に出る歟多婆多とは棚機の約る成べし

【瀧川弘美曰】むかしは田幡と書て多南婆多と呼しを今は多婆多と呼有田の幡をたなばたといふは渡の邊をわたなべといふに等しく昔言便なり【正生考】此説によるるときは田之端といふ地名ありて而後神社を此處に齋祀りたるやうに聞ゆ猶考ふべし

【延喜式】山田の郡多奈波太の神社【本國帳】正四位下棚機天神

集説云田幡の宮則是なり天の棚機媛命を祀る【度會延佳曰】天の棚機媛命をして神衣を織しむる事古記記古語拾遺等に見ゆ此故棚機を織姫とす是を織女星と思へるは名によりて誤れり【本居宣長曰】棚機といふは機の事にて機物は則棚の構あれば也夫をみる神なる故に棚機姫と名にも負玉へる也【正生考】天とは稱贊ていふ詞也天の香具山天の云々なきいふがごとし【延經神主曰】棚機姫の命の裔彌千々姫の命は伊勢大神宮機殿の始なり上古は伊須大の川上宇治大

宮の際にありしを落察天皇の御時に多氣の郡今の機殿の地へ移し立しといふ【雜例集云】神服等の遠祖天の御杵の命をして神服司とし八千々媛命を織姫とすとも見へたり【正生考】されば是等の御神を此村にも齋祀れる成べし萬葉十に 足玉も手玉もゆらにおる機を君か御著に縫あへむかも、とよめるは彌千々姫などの神機ををるさまを詠たるにて七夕の歌にあらず玉のゆら／＼鳴とは本朝の上古は女も男も玉をもて身の飾とせれば織たぎに鳴ぞとなりこれらの歌よりや誤りけむ後世天の棚機姫の神に織女牽牛の二星を混同して七月七日毎に神樂祭禮など奉るやうになりしは誤れりといふべし

【附言】谷川士清曰いせの國一志の浦に星合の濱と呼所あり星合村もあり星崎星川星山星此濱夫木集にも歌見へて其名も久し然るに其地機殿に程近ければ後世混同して七夕の宮鷗の橋など附會し近年は毎年七月七日人々群集せりといへり【正生考】世俗の誤る事何處も同じ秋の夕暮なるべし

志賀村東西の二村あり

假名書の地名なり志賀は志和に通へり横道なり何處にても志賀といふ里は皆水邊にあり波の皺をいふなるべし萬葉一に樂波の志賀の大廻太同二に神

樂波の志賀左射禮浪など詠るも皆波の鼓と聞へたり是を縣居翁は小竹並【橋守部曰】志賀は濕き陸の約るなるべし久仁賀の賀ももとは在所住所の加にて清濁は異なれども同じき也ともいへり猶考ふべし【里老曰】此地邊往昔は海水のさし入りたる所といふ今も地を掘ば貝殻の出るといふ

【延喜式】山田の郡綿神社【本國帳】從三位和田天神

【或人曰】西志賀村八幡宮の地なり

社 家 森 氏

【縣居真淵曰】綿は借字なり海を和多といへるは即ち渡るてふ意也【正生考】和多天神は今兒の宮といふものは是也八幡宮より巳方一町にあり【社司曰】兒の宮は舊は本社之地相殿にありしを近世今の地に遷して攝社とせり古證文にも和田八幡と一串に書有る書ごもありといふ【正生考】社殿に兒の宮は天の御中至尊を祀るといふものは戰國以來の誤也謹考に綿の神社は祭神海童三神也海童の字に就て後世兒の宮と呼なるべし

【考證】筑前國精谷の郡志加海神社は資加島宇瀨村にありといふ相傳て神功皇后新羅國より歸陣玉ひて譽田の天皇を産玉ひし所なれば則宇瀨村と號くといふ彼社傳に神功皇后譽田天皇を祀るといひ貝原好古の説には表津海童中津海童底津海童の神三神を祀て是を志賀清賀大明神と呼ともいへり

【正生考】されば當社も往昔筑前國に倣ひて海童三神及八幡大神譽田を齋祀る事なるべし地名の同じきに依て其神を祭る事世間に例おほし再按に綿天神を專兒の宮と呼奉る事は譽田天皇を降誕養育の事より傳ひて兒とよび成にもあるべき歟されども前説海童三神より轉りて兒の宮といふ方を勝れりとす

【附言】兒の宮は小兒安全の祈願をかくる人おほしとなり此たぐひ猶あり禁裏御産の時粥を調する嘉例に甲斐國七孫子村の米を用ふる事は甲斐の音粥に近く七孫子は七世の孫の義を祝ひてなりとぞ又山城の國梅の宮の土を借受て婦人安産の守とする事は只うめの語を借て呪ひとするのみと也或はいし神を石神社戸とも呼によりて願成就の報謝に杓子を納め或は本國間々の觀音に乳汁の垂る祈の叶ふもまよといふ語に基きてなり凡て是等の事今の世の人智をもて見る時は愚なるに似たれども上古質直の人心より觀ときは大きに感情ありされば海童に縁て産の子安全の祈を爲も理りなしともいひがたきなり

社

村

【天野信景曰】往昔火社村といひしを後世火の字を忌て單社村と書といふこ

は火高村をいま大高とする類歟

【正生考】延喜式及本國帳に所謂山田郡羊神社は隣村瀬古村の條にしるす見合すべし

安井村

地名正字なるべし用水に富る意なるべし昔より玉野川の水を此處にて自在に溉たりとみへて地名に負しか今も此村に伏越の御槌あり又此村より十町餘り川上にても伏越あり並に大御城の御用水なり

光音寺村

【瀧川弘美曰】舊名盛綱村といへり今は寺院の名也

福徳村

福徳中切成願寺の三村をすべて舊名を安食といふ福徳とは祝言の俗語なり【和名類聚】春日部郡安食郷【尾張人物志】葦敷二郎重頼【正生考】和名抄の安食も填字なり又葦敷も正字ならず然りとしていまだ正字を考へ得ず按に此地より北東拾餘町に味鏡村あり天野翁の考に味鏡は神名に出るといふ味鏡の名いよ／＼神名に出るとならば葦敷も亦阿治紀の假字にて味鏡高彦根の神名ありいへり味鏡の約るもの歟されどもこれは一定せず又一考あり阿

治紀の名は足近今曰美濃と同語にて阿治紀とは刀鳴の住所より呼初て正字刀鳴所の意ならん歟二ツの内いづれ能けん後の君子なを訂正すべし

【天野信景曰】葦敷二郎重頼人物志作重義の像は此村の聖徳寺にあり【松平君山曰】其像を見れば則是羅漢の像也恐らくは好事者の附會してこれを爲るのみといはれき

【一書曰】後世鎌倉の頭木ヶ崎長母寺に一個の僧あり博學秀才也安食を福徳と改め大井村を如意と更むといふ如意福徳並に佛語なり【瀧川弘美曰】天正十一年織田信雄分限帳に安食村中切村常觀寺村の地頭等數人の名見へたり此頃まで安食村なるに是より三百年も前に然有理やあらん此説取べからずといはれき

中切村紀瀨同郡の内に同名あり此故に福徳中切といふ

成願寺村清音に呼支村一 米ヶ瀬

地名の正字は常願寺村と書べし【松平君山曰】安食莊司源重頼の法名を常觀といふ故に菩提所の義也と所は漢語なりを常觀寺といふ今は村の名となる【正生考】されば常觀寺村と書べきを戰國以來濫吹せり今此寺なし

稻生村

【天野信景曰】中古は伊奴村と呼し成べし【稻葉通邦曰】稻生は舊の伊奴むらなり土民伊奴をいのふと引て呼たる故に遂に稻生の字となる【里老曰】後世の里長謂らく犬村と聞へて不可愛をもて稻生の字に改むともいへり【正生考】伊努は假字書なり正字閻沼の義なるべし沼を古言に奴といへり此村往昔莞蕪を織る蘭を産せばなり近世は小田井村より多分産せる故に世俗小田井蕪と呼て稻生蕪とはいはず

【延喜式】山田郡伊奴神社【本國帳】從三位伊奴天神

社 家 山 田 氏

今は熊野宮といふ也其相殿に天神を祀るといふ則伊奴天神是也とす

【正誤】本國帳の集説にいせの國菴蕪郡稻生村伊奈富神社は祭神保食神也此と同神歟といへるは大非なり然有べき理なり祭神いまだ考を得ず後人猶訂定むべし

【附言】出雲風土記云出雲郡伊農郷は國引ませる意美豆努命の子伊奴大須美彦佐分命の社則郷中に座有故伊農といふと見へ又秋鹿郡にもあり是には伊努の郷は彦佐別命の後妻津媛命國巡に幸せし時伊努波夜と詔玉ひさ故伊努といふとも見へたり兩所の伊努の郷其傳別々也按に何れ風土記の

説は民間に語傳たるを其儘に書留たる物なれば謬誤も多かるべし取捨せずば有べからざる也

【里老曰】古へ清洲より熱田へ往來するに此宮の前を過る其頃下馬榜示のありし所を今も下乗地と呼有り

名塚村音濁

正字苗束村の義なるべし或人後世名塚大蔵といふ人の住所ありし故に呼歟といへるものは本末の違なりとぞ○凡地名に名といふに波といふあり苗をいふあり近江國蒲生郡に苗村あり○天文弘治の頃此村に織田氏の壘あり佐久間大學助守之
眞福寺村

【瀧川弘美曰】名塚眞福寺はもと伊奴村の内なるべし

堀越村 支村一 高塚豆清

【里老曰】堀越は往昔枇杷島川の西上小田井に隣りてありしに何時の頃にや川東へ移りてより堀越と名を替て舊名は絶たりとぞ今も小川の西に舊宮の跡あり【正生考】さる時は放越の意歟此傳詳ならず猶尋べし【野口良曰】庄内川の堤際に東岸居士の橋跡とてあり村より辰巳方二町に方るといふさ

れば今寶林寺の境内にある東岸居士の橋は橋の舊地にはあるべからず
兒玉村^{多調}

【瀧川弘美曰】兒玉庄左衛門氏行の氏族武藏國より來て爰に住て後兒玉村と
改む其子孫代々丹羽氏を稱せり【正生考】兒名を失ひたるにや

枇杷嶋村^{志田} 支村一 元屋敷

所は川の東にあり今は城下より陌續きとなる舊屋敷といふ所は通りより北
にあり舊村の地也今は支村のごとし地名音訓繼々にて後世の俗語なり地名
は只の枇杷の木のある島といふ義なるべしと思ひしが否とて是は阿佛尼の
琵琶塚より起りて枇杷島枇杷池など呼よし次の小塙塚新田村の條下に擧た
るを考へあはすべし枇杷池といふ時名は今は下小田井村の境内に入て川の東西にあり○山

【正誤】枇杷島の事を井戸田の龜井山の縁記及當所清音寺等の縁記にいへ
るは治承三年太政大臣師長公井戸田に左遷の折から村雲の長の女に契り
玉ひしが歸路の時御篋にしら菊といふ琵琶を賜りしを彼女その御ひはを
抱て御跡をしたひて爰まで來りしが歎きあまりて 四緒のしらへもたへ
て三ッ瀬川しつみ果ぬと君につたへよ、といふ歌を詠おきて遂に池水に
身を投てむしくなる此故に琵琶池また琵琶島など呼といへるものは皆

作り物語りなり

【正生考】是は加賀守師高が故事を師長卿に附會せらるものなり新著聞集
新續故事談などには遊女とせり是亦好事家の嘘文なり師高も井戸田に配
流の武者なり師高菴津の驛の遊女に相狎て互に睦びしが師高兄弟當國小
熊^{今は美濃}に於て討死せし時敵方師高が首を鼻にかけて川岸に曝しけるを
かの遊女請受て厚く葬りし事源平盛衰記かやらんに見へたり此事を混同
して師高を師長公とし阿佛尼の琵琶を白菊の琵琶とし遊女を村雲の長が
女に取なし剩此姫年長て伯母御前と仇名を得たれば葬りたる所をも伯母
塚といひしを小塙塚と詭るなごさま、附會たるみな妄誕なり惑ふべか
らす

【野口良曰】枇杷島村の總兵衛橋は愛知春日井の郡界なりと

枇杷嶋川

天文の頃までは小田井川と唱ふといふ今二橋あり大橋長六十九間 小橋長
二十九間

宮野

大橋の南西三町に宮野といへる所に乞食小屋の一むらあり宮野枇杷池の畔

名は川を越て西にもあり【正生考】みやのは水尾沼の轉聲なるべし枇杷池も田所となりて今は小田井村に屬といへどもとは此枇杷島村の境内なるべし

【附言】中島郡山崎村の小名に枇杷窪といふありこは枇杷の木のあるより呼といふ又近江國なる水海を琵琶湖と他名せるは其象形の琵琶形に似たるをもて呼とぞ

小塙塚新田村小昔

舊名を橋塚といふにや【佐分清多曰】予一時小塙塚新田とかいふ里の道をゆくに道路の東に松の茂れる森あり歩よるも遠からずみれば小やかなる塚あり年経て村竹などすよろに生たり塚はちくと南北に延て上に禿倉を立たり又其側に亡人のしるしもあり土人にどへば是はむかし古佛の辨才天とかやの琵琶を埋まれたる所となん或はいふその琵琶塚は此里の内異所にありしをいつとなく民の手に削られて今は何處とも其跡だに所定めずとも申き清多按に阿佛尼の東國記に云卿馬家にわかれまいらせぬる後は物のね誰にか聞かせんよしなき業と思ひながらこの琵琶こそ美福門院より傳はりて定家卿の賜へるものになんあれば卿もいと恭々しく持なしたびぬ爲氏に譲

られて爲相にわたさんも便なしと搔負せて旅の徒然交廣繁と共に遠江へゆく旅中なり慰めけれども後の世の爲ともなれと思ひ怛て今こそ尾張の橋塚の邊に埋ませ日ごろ書置る經と共に世に永かれとて

新るてふ今より後の四の緒のいとなみはてし罪のかきりを

と見へたり今れもふに土人のいへる古佛とは阿佛の誤りにて小塙塚も亦琵琶塚の轉語にやといへり【野口良曰】小塙塚の辨才天といふは琵琶を祀るともいふなり【正生考】此東國記に橋塚のはどりに埋ませざれば其以前より橋塚といふ名目はあること著し

助七新田村

近世の新治なり新川の西にあり

小田井村上中下の三村あり 支村一 坂井戸上小田井の支なり

名物 疊表

大井小田井は皆田水を司ぐるの名なり正字なり上小田井は橋より北十町餘にあり橋爪町は一名間屋町下小田井の境内にて橋守もあり○治國寛永以來青物の定市始る天王の社は寛文四年に建立とす

【天野信景曰】後世室町の末織田大和守信武新波氏の家老小田井の城主にして當に

清須にありて下四郡海東海西を治め命令を國內に施す故に權威強し【野口良曰】大和守信武の城墟は西方寺の裏にあり古城志に東西三十間南北五十二間四方二重堀と見ゆ城前の切といふ所は織田大和守の家中住所の跡にて屋敷ごとに堀あり又城跡といふ所に五十坪ばかり藪あり藪の中に塚あり持主の農民塚を毀つものはむかしより皆其家潰るとて甚惶るといふ

須ヶ口村須ヶ口村 支村二 鍋屋 二ツ萩

正字洲所口の義なりさて須ヶ口を一ツに外町そとまちとも呼有○支村鍋屋は往昔鑄物司の住所なり故に鍋屋といふなり【仙柄政友曰】二ツ萩の町は今の小田井屬と須ヶ口屬と入交なり

土器野新田村

【成人曰】寛永のころは須ヶ口村の内なりしが近世一村に立といふ

【正生考】清洲小洲賀須所口河原毛野中河原下河原などは皆川の洲につきて呼地名なりざるを【新著聞集云】かはらけの里といふよしはむかしもみちといふ女かはらけを造りて國の名物に備へ奉りし所ゆへにいふと云々

【正生考】うそなりこは文字につきて附會語したる説なりかはらけのとは河原上野といふ語の自らに約りたるなり加美の反紀なるを計にかよはせて河

原毛野と呼るなりこれは須所口の河原に上中下の差ありてよぶなるべし河原上野は下河原に相對へたる心内とする

下河原村

小名に中河原といふあり

地名正字なり是亦須ヶ口と舊一圓なりしなるべし

【本國帳】山田の郡從三位河原天神

【集説云】小田井庄河原村の星の宮と稱【正生考】といへるものは如あらん後の君子なを訂すべし

堀江村

地名正字なり往昔江を堀て沖村平田村邊の水田を落せし所なるべし或は西堀江とも呼西といふ事心得ず猶訂すべし

新川

天明四甲辰年初て開鑿あり天明五年成此新川は平田二子久地野大の木比良如意豊場六石大氣村の邊總て廿八ヶ所の惡水落なりといふ委くは比良村の條下にしるす

阿原村 支村一 上阿原

言便に阿和良といふ正字は栗原又は荒原の約るなるべし【瀧川弘美曰】織田信雄卿のとき天正年中の記録に栗原村と見ゆ

寺野村海東郡に同名あり

後世清洲城下の時寺町の所といふ今に此一村はみな諸寺院の農民どもなり

田中村郡内に同名あり故に清須田中といふ

【箕浦賢屯曰】田中は近世村と町と二ツにわかれて町の方は再び清洲に屬て田中町といふなり

春日井郡上卷留

尾張國地名考第二册

春日井郡之部

清須村 支村三 伊勢町 小塚町本町共云 野田町

【天野信景曰】きよすは舊は中島郡也今は春日井郡に入【正生考】須は借字にて清洲の義なり御高帳に清須新田村と書たるは慶長中清須の府内を名古屋の地へ移し給ひて後、武家商人第宅之地再び外田と起返りたれば新田と呼なるべし【箕浦賢屯曰】清須の驛場は神明町と唱へて無高なりさて今清須十四ヶ村といふものは織田氏城下の時の名殘なるべし十四ヶ村とは○鍋屋分、田中町分、外町分、内須ヶ口分、寺野分、朝日分○西市場分、内北市場分上の二は中島郡也○廻間分、土田分、上條分上の三は海東郡已上十一ヶ村此に支村の三を加へて十四ヶ村となる皆清須屬なり此内にも親村の無あり親村有ありされ共今御高は別々にて親村の高と清須屬の高とは混同せず清須は春日井中島海東の三郡相接の地なれば城下繁榮の時は第宅右の村々に及べるなるべし【正生考】支村小塚と書は非なり小須賀と書を空とすいかにといふに須ヶ口は南に小須賀は北に連ればなり往昔清洲小洲所、洲所口、河原など皆地脈を引て一圓の砂土なればなり

山王權現

天正の頃靈驗ふはしとかや此ゆへに舊き繪馬あり社説に寶龜二年當國疫病流行よりて素佐雄尊と大已貴命を此地に祭る又天正八年庚辰十二月織田太郎左衛門山王廿一社を造りて近江國坂本山王神地の竹根を移して爰に植るといふ【正生考】寶龜二年云々は疑なきにあらず天正八年已下は實なるべし

上島神明 外宮

社人 加藤氏

神明町にあり

御園神明 内宮

社人 齋藤氏

内北市場にあり

【正生考】城下繁昌の時齋祀たる兩宮也ざるを御園神明を天野信景翁は中島の宮の舊地なりと埴尻に書されたるは誤なり中島の宮の舊地は本神戸村にあり

清須城墟

驛宿の北東にあり【古城志云】東西三十八間餘南北百四間三重堀あり【一書曰】永和元年斯波右兵衛督義重國衙の庄松下の府を清須に移し見ゆ【松

平君山曰】清須の城は尾張守斯波高經より始る高經は越前尾張遠江三ヶ國の領主也子孫世々領せり高經本州に住せざるによりて其臣織田山城守を自代として國務を司らしむ其後諸國爭亂止まず織田氏の子孫も亦榮へて世々郡司を治む遂に信長、芝良銀を逐退て清須に移る夫より此城に信長の二男平信雄或は豊臣秀次福島正則薩摩守忠吉卿と引續て居城あり權大納言義直卿に至りて名古屋村に城を移したまへるより此城廢るといふ
慰め草に

更にけり流るゝ影も川波もきよすにすめる短夜の月

僧 正徹

夏の夜の月の清須にすむ鶴の霜のふり羽の色の寒けさ

同 宿の歌

此等の歌は近世の歌にして名所とするに足らず

【佐分清多曰】公任の髓腦に 藻荇舟いままそ渚に來寄なる汀の田鶴の聲さわくなり

とあるものは爰の風景を詠しにあらず正徹の歌も風體相似たれば此歌に因て詠れしにや

朝日村

名物 柿實

地名正字なりされども其謂をしらす

【考證】丹後國熊野郡に朝日村あり此地は北より入海ありてその入海の西に方位てうしろは地理高く親しく朝陽の氣を包む地なれば朝日と號く又其入海の東方は同國竹野郡なり此處に夕日村あり是は又地勢夕陽を受る地なるによりて夕日村と號く本國の朝日村は然有と見へぬ地理なれば今に其由來を明白にせず或は姓氏に出る歟

【因書】延喜祝詞式立野風神祭の條に吾宮は朝日の日向處夕日の隱處と

いへるは旭も夕陽も照せる吉宮所也と壽く詞なりとぞ今名古屋の御城下に朝日町朝日神明朝日天道などありこは單世俗の祝言にや猶尋ぬべし

下之郷村 支村一 野田

中之郷村 同名あり

北野村 同名あり

【龍川弘美曰】此三ヶ村並てあり北野は北の郷の間違なるべし是もとは一郷にして疑らくは地名を失ひたるものなるべし

北野村に菅原天神の宮あり【正生考】總て今北野或は天満なぞいへる村々に菅原天神を祭らぬ所なし是は地名によりて後世菅神を齋奉りしものなるべし後世鎌倉以來の流行事なるべし

落合村 同名あり

支村五 禰空屋 宮重 西牧 分地 蓮花寺島

本會の分水青木川と彌名川の惡水と此處にて落合故に名づく

名物 獨活 茄子 大根

支村宮重の大根及蓮花寺村の茄子は名産にして世人のしる所なり支村といへども名物を産せるが故に却て其名よく享る但し宮重の名は中島郡に東西の二村あり名物なしこれと混同すべからず禰空屋は假名書なり【正生考】宮重とは宮茂みの約る歟又は宮四空の俗語なるべし而して禰空屋は其神社を守社人のト居に出るもの歟然はいへど其神社をしらす後人なを考ふべし○枝村五をすべて落合六ヶ村といふ【里老曰】落合佛音寺の前に廣き墓原あり村民は天魔ヶ塚といふ其謂をしらす

宇福寺村 支村一 山之越

寺の名にはあるべからず地名末考【秦鼎曰】伊福といふ地名諸所にあり若轉聲歟【正生考】本國畿に海部郡と愛知郡とに伊福の神名ありて此郡内にはなし

鍛冶一色村

かぢいしきと呼をよしとす楯氏の考にいしきは入洲所なるよし詳なれど爰は然にあらざるべし鍛冶職の者始めて居敷せるより呼なるべし

【考證】遠江國天龍川の古川通に添たる地に船越一色村、佐藤一色村、茄子一色村の三村雙てあり船越一色は船越が家居し佐藤一色は佐藤某が家居せし縁なり茄子一色は詳ならねど蓋し茄子を植たるより呼にやとも思はるみな後世の俗稱に本づく是等に倣へば鍛冶が居敷歟猶訂すべし

法成寺村中島郡船島の支に同名あり 支村一 東高野

或は放生池の誤りにや猶尋ぬべし

石橋村中島郡に同名あり

地名正字なり【或人曰】往昔は石工の手に成る石橋にあらでも只小溝に一石をもて架わたしたるをも石橋とよべり

西之保村海西郡に四保と呼あり 支村二 青野 犬井

【天野信景曰】保は鎌倉右大將頼朝卿の時國々に保司を置れしより始る【正生考】爰を以、保は初めより字音を用ふ保は五家をいふ字書に保は守也又養也と見令に凡戸皆五家相保、一人爲長云々保内の人有所行詣並語同

保知と見へたれば今の五人組なり此村往昔保司の有しにや西といへば東の保もあるべきに其對もなし

野崎村佐田音○中島郡に同名あり

西の保の支青野の先にある故に呼にや猶尋ぬべし中島郡の野崎村とは義異なり

沖村 支村一 岡村

沖とは深田の廣向をさし岡とは陸田をいふなるべし

平田村音多清 支村三 前並 平塚 城

名物 芋莠

【正生考】平田正字歟延喜式本國帳共に載る春日部の郡非多神社は此神の天神歟らりるれろの五はぬきさしよて呼こと常也後君子猶訂正べし平田九坪も九坪を上ひらたと呼さず且往昔平田和泉守ひら田に居城のよし平田寺に位牌あり

九坪村

このつばを約めてこの坪と呼地名正字なり

二子村中島郡海西郡に同名あり

地名詳ならず往昔此處に小き砂山などありしにや

【考證】相模國箱根に二子山あり伊勢の國鈴鹿に三子山ありいづれも遠方

よりやさしく見ゆるをもて呼有
大野木村 紀潤

名物 藁蕨

比良、大の木も一圓なるべし大乃木天神は隣村比良村にあり集説に大野
木村六所明神歎といへるは非なり

比良村

名物 蕨

比良は假名書たり正字平の義なり

【延喜式】山田郡大乃木神社 【本國帳】大鷲天神

【正生考】比良村天神の宮是也

社人 高田地村町田氏

比良の池あり民は蛇池とも呼【松平君山曰】今は辨才天を祀る二月七日辨
天祭の日赤飯を蒸て池水へ投込といふ

久地野村 智潤

【市岡猛彦曰】久地に久知の誤なるべし口野なるべし野口に同じ此邊平原の
地にて野といふべき地なり【正生考】智濁音に唱るをもて按ば葛野の轉聲
にもあるべし

新川通の川上なる久地野の堤上に碑文あり是は天明四甲辰年御奉行水野允
君の新川を堀割て比良村大蒲沼の湛水を落されし成功を稱賛し石文なり碑
面には比良、味鏡、大乃木、喜總次新田民家如意、豊塙、青山、六師、熊
之庄、大氣、鹿田、久地野、二子、井瀬木、高田地、能田、片塙、九坪、
平田、阿原、助七新田、堀江、河原、毛野新田、小塙塚新田、加島新田民家
小田井三村、右二十八ヶ村の悪水を切落して不毛を助くるよし樋口翁の作
文に見ゆ按に其中にも第一に大蒲沼と久地野、二子の間の深沼、平田沖村
の間の深田を主と干せんと計られたるなるべし【菅谷通至曰】水野士淳、
新川開鑿の主事はせられたれども其發端は中村先生通稱張本なりとぞ先生
夏天大雨の降毎に笠笠を著て國內を翔ありき密に水利を考へ海東郡には日
光川爰には新川の悪水落なくては叶はざる所なりと視決て後、予は儒者な
り子は官人の事なればこれを執行たまへと密に水野氏に教示られたりとな
り世人水野氏の功を普くしりて中村先生の功をしらすといへり正生爰をも
て書

高田寺村

寺は地の字の誤なるべし高田寺天台は地名に因て後に寺號に定むと也【和

名抄】春日部郡高苑郷【里老曰】高田、比良、二子、久地野、井瀬木、片端をすべて世に高苑六ヶ村と呼【正生考】高苑後世高田と更りたるなるべし

【本國帳】春日部郡從三位小高園天神

【集説云】高田地村白山宮と呼是なるべし 社人 町 田 氏

片場村

【市岡猛彦曰】片は借字にて堅場の義なるべし堅き土地の義也古事記上卷に堅庭者向股に踏那豆美云々とあり此堅庭とは堅き土場をいふなり齋土場を齋場、大土庭を大庭などいふ例いとおほし

井瀬木村 紀河

地名假字書也正字井堰なるべし【谷川士清曰】堰をみとよむも井の義に同じ塞をして水をあつむるなり今俗訛りてみをゆといへり【或人曰】蛇籠に石を採入て堰故に石堰の約りにて伊の假名也ともいへり

【延喜式】春日部の郡調原の神社【本國帳】從三位調原天神

【松平君山曰】井瀬木村栗原天神といふ社はなるべし集説云久仁と久利と韻通ふといふ

彌勒寺村

寺院に本づく但し今彌勒寺といふ寺はなし

徳重村 支村一 米野

【或人曰】人の名に出るにや

鹿田村 多清 支村一 坂牧

地名未考

【本國帳】春日部郡從三位志賀田天神

【正生考】此村に天神とよぶ宮あり是なるべし集説には鹿田村の熊野新宮歟ともいふなり

新宮社人 廣 瀬 氏

【天野信景曰】新宮は古へ熊野之庄にあり室町の頃の村北に遷す舊墟に松一株を存寛永年中今の地に遷し立て新宮と呼ふ

熊之庄村

熊の庄三十ヶ村の親村なるべし熊の庄とは後世の地名なり古言に久萬は曲るこゝろあり【橋守部曰】久萬に隱意もあり熊籃、熊笹の類なり萬葉十四に久末度爾立天

とみわたるも隠所に立てたり

此村に熊野大神の宮あり是は後に祭りたる心内す

能田村多調

【近藤利昌曰】此村は熊之庄の異方に引續にある小村なり舊は一村なるべし按に能は熊の字の心を去て書る歟熊田といふべきを能田と呼にはあらぬか【正生考】大凡地名は稱呼より轉るもの多く字畫より誤るものは少し猶尋ぬべし或は野田の轉聲歟

【因書】美濃の國大野郡の山の奥に能郷とよぶ所あり此村の白山宮は産神也毎年三月十二日の夜此宮の社家四五輩と村民の頭百姓共立雜りて神事能をつとむ能樂は往古より村に十番傳りて五番宛隔年により宵の間に男女打毬り拜殿にて踏歌踊りありて能は亥刻より明卯迄に終る予其能を見るに初に翁の舞を何曲も奏こは祈願者の數によるといふ時に傍より口上を演る男一人舞臺に出て扇を逆手に持眩を張て一曲毎に是は何所の誰某の御祈禱なりと名乗也次に三番曳あり脇能より四番目迄は太鼓物といへども太鼓を用ひず只祝言の一番にのみ太鼓を用ふ此里の格なりといふ其故をしらず又舞の手も唯方の手も通例とは頗異なり狂言はさして替る

事なし【村民曰】能樂はもど此里より始る此故に能郷といふとぞ

【正生考】信がたし謠は足利義滿公の時に始り能は東山義政公の時より始るよしなれば此村より起るといふことは民間にての附會なるべし按に能郷能田のたぐひは只自然なる地名なるべし何國の神社にも春秋に神事能のある事珍しからず

藥師寺村美濃國に入たる藥師村

師は借字にて正字六石の約る也三河國額田郡に六石村あり同國渥美郡高師村今高足村と書なり又も高石の義也石を志とも蘇とも呼こと古言の言便なり【延喜式】春日部郡牟都志の神社【本國帳】正四位下六師天神【集説云】六師村白山宮是なり

因記美濃國石津郡も上古は志豆の郡と唱へしにや志津村は其郡名の根元にして今古切石を産出せる地なり然れ共志津村は石津多藝の兩郡相接の所に方位故に後世多藝の郡に入れば世俗此謂をわしらず爰をもて附記て驚し置のみ

豊埜村 支村二 青塚 伊勢山

【市岡益彦曰】豊は美稱、塲は庭にて豊庭なるべし【正生考】正字豊穂の轉聲にもあるべし此村往昔は伊勢大神宮の御厨の地にや伊勢山の名ものこれり

【延喜式】春日部郡物部神社【本國帳】從三位物部天神

【瀧川弘美曰】豊塲村の八所明神をいふなるべし

社人 松浦氏

常安寺曹洞に毘首羯摩が作るといふ釋迦、阿難、迦葉の三體あり【瀧川弘美曰】世俗豊塲の寐釋迦といへども立像なり

如意村 支村一 午新田

村民は如如意意と呼此村舊名を大井と呼ぞ近藤利昌曰大井の舊村は今の福徳村の北七八町にありしが往古今の地へ村落を引移すといへり【天野信景曰】和名抄山田の郡神戸郷は此地なり

【延喜式】山田郡大井神社【本國帳】從三位大井天神
集説云如意村六所明神是なり

社家 松岡丹波

【相傳云】筒男三神綿津見三神を祀る【正生考】大井は水の湛たるを云なれ

ば祭神も亦然もあるべきなり【或人曰】神社の北に大井の池ありいにしへは廣有しが近世漸々に田所と成て今は其形ばかりに成といふ風土記に大井田川といへるも此所なりとぞ【正生考】今の村落の南にも大江の跡残りて淵端に辨才天歟の小祠樹木などあり爰等も共に往昔の大井の境内歟【瀧川弘美曰】大井天神に舊本地佛の如意輪觀音あり此故に後世如意と改るといふ觀音は今熱田の澤の富春山妙安寺の本尊となる靈佛なり

味鏡村 支村二 原新田 名栗

地名未考他國に網島と書村あり越前國に安治麻野あり

【延喜式】春日部郡味鏡神社【本國帳】從三位味鏡天神

【天野信景曰】あぢま村六所明神とよぶ社はなり

社家 松岡式部

【渡會延經曰】物部氏の祖、宇磨志摩治の命の子、味間見命也【信景翁曰】

此故に所の名共なれり護國院の文明十二年の縁記に鏡の池の事によりて味鏡と書などいふものは後世の附會なるべし

護國院眞言宗

【信景翁曰】此寺は僧行基の開基なり鏡の池より藥師佛の金像を得て安置す

といふ四の池口寺より又六所明神を熱田の末社ともいへば昔は熱田の所攝にや古佛多し寶珠の本尊とて虚空藏あり執金剛は安阿彌の作とて破壊ながら樓門にあり般若經の殘卷あり奥書に安食、西の莊常觀寺觀進沙門寬禪曆應五年の文字あり是同郷常觀寺の經藏なる歟屍墟

味鏡川

船わたし玉野の下流なり

春日井原新田村

一名上原とも呼【一書曰】慶長十六年清須の長福寺を愛知郡日置村の地今七寺に遷す時用材を此處より伐採といふ【里老曰】春日井原は近世漸々畠に起し民屋も出來て昔の像形をうしなへり抑此原は南は味鏡原より北は外山村の南まで長様一里半餘もある原なり幅は西は豊場より東は下原まで二十町許もあり【正生考】上原は西にありて下原は東にあり是は下街道上街道と呼例に倣るにや

大手村天沼

地名未考或は田樂の古城の大手先に當れるにや
田樂村加洲

多良我の語はいまだ思ひぬす田樂の二字は填文字なり其例は山城國相樂肥前國の晏樂上毛野國の邑樂の格にて樂の字をさがらかのラカにもみよらくのラシにもおはらぎのラギにも填たるなるべし然りとておのくその正字をしらす蓋したらがは正字垂川の下略言便歟美濃國石津郡に多良村ありたらと垂る義理もあり平の義もあればなり後人なほ考ふべし

【延喜式】春日部郡伊良波刀の神社【本國帳】正四位下板嶋天神
集説云多樂村八幡宮是也

社家 鈴木氏

【相傳云】往昔板面に鳩を畫て神前に獻る此ゆゑに號くといふ【度會延經曰】石見國那賀の郡多嶋の神社に同じき歟【正生考】本國帳に板嶋と書たるは借字なるべし今八幡大神を祀れば板嶋とは猶々空く聞うれどいかゝあらん猶考ふべし【松平君山曰】神事はほし正月六日田祭あり同十七日奉射あり八月十五日神輿わたり及騎射あり

【附言】やぶさめの語其正字をしらす谷川士清はやぶさめは東鑑に流鏑馬をよめり矢伏射馬の義なるべしといひたれど萬葉に投左乃とよめる左は則矢の事なれば矢伏射馬にては矢と射とかさなれり後人なほ考

牛山村 ふべし

【瀧川弘美曰】或人の説には往昔此村は内山と呼ばる所なりいま牛山と呼ばる則内山の轉語にて戦國以後の誤りなり和名類聚に春日部の郡、山村とあるも此内山、外山をすべて呼しなるべしといへるは甚よろしき也と【正生考】是は妙解なり今の牛山、外山、青山、板場、一之久田、小針村など皆都て山村の郷の曲輪なるべし

【正誤】外山村の外山天神は山村の郷の總社也扱本國帳集説に牛山の熊野の宮を春日部郡片山の神社歟とあるによりて近來識人ありて熊野宮を式内の宮なりなどいふものは取にたらず

外山村 南北の 支村二 櫻井 大山 共に南外山の支

とやまとは舊内山に對へていふ南隣の牛山はもと内山村の轉語なりと也

【和名類聚】春日部の郡、山村の郷

【延喜式】春日部の郡外山神社【本國帳】從三位外山天神【正生考】南外山の天神の宮是なるべし集説に北外山の六所明神とあるものは誤なるべし【松平君山曰】里人は六所明神といふ往昔は神祠も六區ありしが今三區ある

のみ【正生考】海道端にあるを今は神明とよべり近來は三區を三ヶ所に分つといふ或人のいへるは神明に二種あり國常立尊を神明と呼奉り又伊勢兩宮をも神明と呼奉ると

【里老曰】此村に巾上巾下と呼名あり巾上は地面一町も高くして東寄にあり巾下は地面低くして西にありこれらもと木曾川の流の一條なりといひ傳ふ其長き事をおもふに北は犬山の邊より始めて南は名古屋までも貫亭たりさて此巾下といふ詞は我が外山村と名古屋とに名殘ありて它所に此名ある事を聞ずといへり

青山村 支村一 阿古嶋

地名正字なるべし支村阿古嶋は赤穂島の約るなるべし

【考證】播磨國赤穂、加保の反固

坂場村

豊場、坂場、片場など土地に就ていふにや

【延喜式】山田の郡坂庭神社【本國帳】從三位坂庭天神

【天野信景曰】春日井郡坂場村三明神といふ宮なるべし【正生考】坂場村は今古春日井郡の真中にて山田の郡の地にあらず坂場の名は合といへども疑

ひなきにあらす後入なを考ふべし
一之久田村多活 支村三 郷中 常普請 出屋敷田一新

一之久田、小針はもと一圃なるべし久田とは正字鍛田の約るなり三河國柳郡に一鍛田村あり地名尤俗語なり後世鎌倉より室町の始までに治起したる村方なり一の久田とは鍛始といはんがごとし後世人生多に増ゆくにつれて原野を治起す時に先一番に鍛を立初たる所を一の鍛田といふ成べし○支村常普請は異名に出たり弘治二年織田信長小牧山に營城のとき普請の作事場より呼と里老のいへり

【附言】普請の字はもと佛家の詞なり上世俗家の造營をフシンといひたる例なしと伊勢貞丈のいはれたり

小針村小音選

此村一の久田に隣りて上下の二切あり上小針の方を本郷とす天野翁の正字小墾の謂なりといはれたるはよろし然りとて後國名に及ぶなるべしといはれたるは甚誤なり其故は此村一面の黒土にして米麥によろしからざれば先耕して以墾起すべき土地にあらす殊更此邊は上古より春日部郡山村の曲輪なれば小針は後世鎌倉より室町の始までに開墾たる事灼然なりさて其類

例は本國の高針、平針を始として美濃國加茂郡の大針村同國加兒郡にも大針村三河の國碧海郡の小針村此外なを國々に同名あるべし など皆右にいふがごとし往昔原野を鍛起して初て畠水田を作るに其土地廣大を大治といひ狹少を小治と呼針と書、張と書のたぐひは皆借字なり

【本國帳】春日井郡從三位粟野三所地神一本粟田と書は誤なり 集説云小針村粟田三所明神是也といへり

小牧驛小音 支村二 舊小牧 小牧原新田
【箕浦賢屯曰】記録に今の宿驛はもと北外山村の境内の松原なりしを寛永十一年松原を伐拂ひて民家を立、舊小牧の村民此處に引移りて遂に馬次となる也是より後舊小牧の方却て枝村に屬といふ【正生考】小牧は正字小馬飼なるべしかひの反きなり【新井白石曰】大きなをうまといひ小きをこまといふ

小牧の馬市

【里老曰】むかし馬市あり其後中絶たりしを寛永七年再び始るといふ
曳馬山

小牧山をいふ飛車山と書有は填字也今の俗字音に飛車山など呼ものは笑ふ

べし遠江國引馬野に等しく小牧と呼ばるより本付たる稱呼也

【相傳云】むかし西行法師此山に登り四方を眺望て詠れたる歌にて
曳馬山ふもこの里のうす紅葉たか染なして濃といふらん」

又一説に在原の業平の歌にて二三の句ふもこにかき里の名をこもあり小
木村は小牧山より坤方半里にある村なり【正生考】斯様の歌は諸所にいひ
傳へる事なり多くは皆後人の偽作なり取にたらずこき草の歌鳴海にあるを
勝れり」とす

古城跡

曳馬山の山上にあり弘治二年織田信長公清須より爰に移して築くといふ四
方三重堀山下方總構西北東の三方は足入沼也所今成田今の小牧宿より山下
迄百六十四間西戌に方る【松平君山曰】小牧、間々、西之島、村中等の諸
邑みな城下に屬信長井之口今なりの城を攻取て直に移られしより小牧の城
は廢るといふ

【里老曰】御陣屋の中に清水ありて二所流出る其中に小蟹多し此故に蟹清水
と名づく

二重堀村保瀨

後世鎌倉以後の地名にて其謂を詳にせず【或人曰】天正十二年羽柴秀吉此
地に砦を營みて織田氏の小牧山の城と對して日根備中守をして此を守らし
むる事ありもし其時よりの名にやこもいへり猶考訂べし

小木村小音古

名物 蕨

小木は假名也實は眞名體なれど爰は假名に用ひたりこきはをぎと同語なり鳴海にてはこき草とい
へり正字萩村なり往古蘆茂き所にして號くなるべし美濃國加兒郡に小木村
小音遠あり

【本國帳】春日部郡從三位菅生天神

正生謹考に小木村宇都の宮明神の端籬の内なる天神の小社はなるべし【里
老曰】天神の社は少彦名命を祀る此社は昔より此處にありと古傳也本社宇
都宮明神は大己貴命といふ是は永正元年織田宰相故ありて下毛野國宇都の
宮の神を爰に祭られしより攝社に屬といふ

【正生考】續日本紀九興福寺の僧の詠有長歌に日本乃野馬臺能國乎神侶伎能
少彦名之葦菅乎植生志都々國固免造計舞與利下略といへるに此里も山縁あ
りげなり

【里老曰】織田氏小牧山居城の時は此村大かた家中の第宅なり又村内に古塚多し氏神の地にも古塚ありといふ

藤島村愛知郡に同名あり

此地名正字也

此村に十三塚と呼所あり今は塚なし民一戸あり五十年前に小水村より爰に出るといふ

【筑前風土記云】筑前國に十三塚といふ物十一ヶ所あり或人の云く十三塚を築く事は後世の風俗に佛を信じて冥福を願ふ者父母の死たる後三日より始めて十三年まで法事を執行ごとに塚を一ツづゝ築く十三とは三日七日二七日三七日四七日五七日六七日七七日百ヶ日一周忌三年忌七年忌十三年忌までに都合せり則十三佛に擬ふ其塚の内には佛經の文など僧に書せてうづむといふ此説さも有べしと貝原氏のいへりざるを十三塚はむかし十三人の首を埋むと村民のいへるものは取にたらず愛知郡齊掛村にも十三塚あり船津村 支村一 蓮花寺島

地名正字なるべし不彌を不那とよむことは連聲の躰用によりて也

【附言】榮筈法師曰大凡音に躰聲と轉聲とあり躰聲といへども用にわた

るときは聲を轉すたごへば雨風竹木稻酒のごとき躰聲も雨雲風疾竹林木蔭稻菴酒糟と轉るがごとし天竺には三十五字音を躰として我日本は五十字音を皆躰とす和闍陀は二十五字を躰聲とす中にも天竺は躰文の外に點畫の字ありて摩多翻譯して躰文合成する時は聲を轉す蘭書と和音は然らず重なるときは轉する事上にいふがごとしざるを世俗此轉聲をしらずして雨氣かせばろし木芽酒樽白壁稻菴などといひ直す却て誤なり

三淵村音不淵 支村一 原新田

地名正字なるべし管子度地篇に水出地面不流者命曰淵水

【正生考】此村に三淵天神の社あり

社 司 中 村 氏

【松平君山曰】相傳ていはく往古より少彦名命を齋祀といふ攝社に諏訪八幡の二社より寛永年中蜂須賀阿波守家政より修復せらる

正眼寺曹洞 寺田四十石餘 寺家八軒

青松山と號す此寺舊は折津村より移ると也

西之島村

村中村

【瀧川弘美曰】村中とは隣村に對へて唱る地名なるべし東を間々と呼西を西の島と呼で此村は其中央にあるゆゑに村中と呼なるべし
此村に八幡宮あり村民本居神と仰ぐ

社人木全氏

或人これを春日部の郡片山の神社歟といへるは誤なるべし
村の正北に天神の森あり是は玉林寺曹洞の扣なり
間々村

此村奥馬山の麓にあり地名詳ならず水岸の空穴深く横に入ごころを方言に間々といふ魚の隠れ住所なり村名或は是等によるにや猶訂すべし
龍音寺淨土の觀世音は乳汁の少き女是を祈るに靈驗ありといふ是は間々乳母との同語の縁によりて其利驗を蒙る事なるべし此例他國にもあり淡路島に淡路廢帝の社あり諸人齒の痛を祈るに即座に癒るといへるは齒痛の語による播磨國人丸の社を防火の神とせることは火止るの言に合ふをこりて呪とするのみと愚なるに似たれども眞の違する所より其利驗を得るなるべし【易林云】書不盡言言不盡意とはかゝる類なるをや
入鹿出新田村一名四入鹿

是は寛永中に奥入鹿の溜池を造しめ給ひ水落通り甚く廣かりしを□□年中に狹め給ひてより出來たる新治なり扱入鹿新田とよぶ地甚長くして、或其村々に屬有あり或は河内屋新田大光寺八田稻口徳右衛門新田のごとく更に名付たるもあれど皆こゝにはぶく
岩崎村佐洞○愛知郡に
支村一 町屋

此村に平山あり西は宮地にて大石おほし見事なり東寄は果洞寺曹洞の墓山なり村落は此山の南洞にあり故に岩崎村と號く
久保一色村

久保と一色と二瀬處あり久保は假名書也正字窪の義也一色の解は既にいへり久保の方は本郷一色は新開なり此村舊は丹羽郡なりしに今は春日井郡に入今も内久保の切は丹羽郡に残りて樂田村に屬有

【延喜式】爾波郡田縣神社【本國帳】從三位田方天神

宮寺 久保寺曹洞

宮は街道の西田中一町にあり社地漸々に擡取て今は場狹に成たり土民縣の宮とも呼は春の縣祭より移りたる誤なるべし正生謹考に祭神御歳神也いま將軍地藏の立像を神跡のごとくにいへど是は本地佛なり

久保寺は往昔くわく窟寺くわくと呼たり今は字音に呼よるを近世書上に聖師寺清水寺といへる
いふものは故ある事にして爲とす思はる今久保寺にもとは社僧なるべし
聖師寺清水寺の且下なるべし
春縣祭

正月十五日也祭の前日久保寺にて祈年穀の札を制りて村中へ配て田毎に水
口を祭らしむ又男莖形を造りて祭日の料とす十五日の朝、久保寺にて福富
をつく其景物は御田扇白米柄の三種をもて只三番のみ突なり丁りたる人々
は其年幸ひありとて遠近の人々元日より仰ぎて此を需むといふ斯て富突す
みて後巳の刻ばかりに窟寺より田方の森まで三町半の道すがらを練物あり
まづ始に神を持出次に神酒神供を白櫃に盛て持出次に本地佛を持出世俗に
神
口聊説也次に藁人形の座像長二尺許なるに神を著せ太刀を帶せてそれに一尺
八寸ほどある木作り朱いろの大男根を附たるを若者共二三人してかつぎ揚
てさも大音に 於保辨能固く縣の森の於保辨能固と喚叫ながら路次をおか
しく練て神慮を和め奉る事也誠に本國の珍祭奇翫といふべし斯て神社に至
著ば本地佛の將軍地藏を社内に入れて其前に男莖形の藁人形も押居て神酒
神供をも供へ各手を拍て神拜し暫時ありて後其神酒赤飯等を衆人に配與へ
て歸る是を土民は久保一色の閉乃固祭といふなり

【考證】古語拾遺に昔在神代の時大地主神此神は田を營るの日、田人に牛
突を喰はしむ時に御歳神の子其田に至りて齋神祭のに睡て還り状をもて
父神に告、御歳神須佐雄怒を發し蝮をもて其田に放つ苗葉忽枯損て篠竹
に似たり爰にわいて大地主神神は肩巫肢巫肩巫はしと蝮を以て占ひ肢巫は占
ふたぐひをもて占ひて御歳の神の崇なる事をしり其怒を解む爲に白猪白馬
なりまごをもて占ひて御歳の神の崇なる事をしり其怒を解む爲に白猪白馬
白鷄を獻て謝奉に御歳神答て云實も吾意也空麻柄空麻柄を持女工に作りて是に
掛て其葉を拂ひ天の押草押草は稻のまゝ飯にするをいふとも見ゆをもて是を押
し苗をおし撫て鳥扇草花をもて此をあふげ伊勢大神宮御田殿に同若如此して蝮出去す
ば猶溝口に牛の突を置先の蝮を戻す意男莖形雄始形のを作りて此に加へよ畔
には葱子蜀椒山椒なり吳桃葉、鹽四種を班置とかしゆ其教に従ふに苗葉復
び茂りて年穀豊稔是今の世、神祇官にわいて御歳神を和祭の縁也と忌部
廣成いへり【正生考】右は御歳の神の神教ながら即其神の神慮を和め厭
ふ故事と成たる事なるべし此村にも其由縁を引たる神事の遺傳はれる也
然るに今の俗は唯戲事のやうに思ひて御神事を卑賤むるは大に誤なり
社頭の邊に木造りの男根時として落てあるなり是は陰莖の弱き人、婚姻
に縁遠き男女、男子のなき人又は下疳痲疾を病む人の祈願成就の謝物な

りどごこは只その縁にすがりて祈るに驗ある事にぞあるべき
小松寺村

相傳て云承和三年小松の内大臣三位重盛毎國に一寺を建て此を小松寺と呼
といふ【松平君山曰】縁起には是より先天平年中僧行基此山の半腹に一字
を創立此ゆゑに小松寺は行基をもて開山とせりと見ゆ【正生考】されば此
に往昔は地名のありたるなるべし

小松寺觀世音寺眞言宗臨濟末 寺領三百石

重盛の像あり山内廣し土人小松寺山と呼此山松茸を産す

文津村通清

【里老曰】此村は新開の地にて往昔池澤のやうなる所を埋立て衆落としたる
物歟足拍子踏ば何處も〜筒々と鳴事一村同じといへり正生考ふみつとは
路藪くの義にや

田中村同郡清須の東

東田中と呼わかつ

本庄村庄の志志

本庄新庄の類は皆後世の俗語也春日部の郡池田の郷の親村にや猶考ふべし

池之内村

本庄、池之内は舊一圓の地なるにや和名類聚に春日部の郡池田郷とあるは
若くは此邊をいひしか後人猶考ふべし

林村

地名正字なるべし

【延喜式】春日部の郡非田神社【本國帳】從三位樋田明神

【天野信景曰】味岡庄林村三明明神歟此村に卑田といふ地あり【正生考】里
老に尋るに此村に今然有畔名はなしといふ詳明ならず【里老曰】三明明神の宮
は村方祥雲寺寶淵の扣也此宮は往昔は二の宮の別宮なりしに天正戰國のこ
ろ二宮の社人これを放捨て逃去しより以來祥雲寺へ拾ひたりとなり【正生
考】駒狗いと古物なり疑らくは本國帳に載たる爾波郡正三位三明明神は是に
はあらぬ歟郡界は違ふといへども其間も近く二の宮山へ續きたり今の本宮
山を三明明神とせるは後歟

野口村久淵

大山の麓に廣野あり其口に當る所なれば野口村といふ
此村の丑に方りて高く茂りたる嶺に後世妙見を祭る世俗野口の妙見と呼二

社あり其故をしらず猶訂すべし
大山村

地名正字也大山は九町計りも登る爰に兒權現の宮あり
大草村愛知郡知多郡に同名あり

地名正字なるべし

【本國帳】春日部郡正四位下草田天神

【正生考】大草村八幡の社をいふにや未定の説なれば猶よく訂べし

【松平君山曰】舊地は古宮と呼所也今猶榿木一株を残す豊臣家權柄の時社産を没收仍て神事悉く絶たり慶長年中社地を今の所に移すといふ

末村上下の二村あり

末は填字なり正字陶村なるべし上古此地にても陶器を製造せしにや禪院を陶昌寺曹洞宗とよぶも村名より本付たるなるべし但し和名類聚に山田郡主恵とあるものは此村にはあらざるべし

【附言】和泉國□□郡に陶村あり今は字音に陶器村と呼とぞ是は神代の時大陶祇神の住し所なりといふ又上總國周淮の郡季村も陶物を焼し所といふ此周淮も季も假字と填字なり

下原村 支村二 南下原 下原新田此内に鳥井松

下原とは上原に對へて呼名也但し爰にいふ下とは水には就ず下とは江戸を指に似たり上街道下街道の下に同じ

大泉寺新田 支村 四屋

【箕浦賢屯曰】大泉寺は往昔池の内へ曳移りていま此村になし寺跡といふ所に古瓦石などあり井筒の石とて慶安の年號あるあり扱此村承應年中には民二十八戸ありしが今は四十戸餘に長といふ

退休寺淨土宗 寺田三十石

世俗は篠木の退休寺と呼、篠木の庄今三十三ヶ村ありといふ

下市場村 支村 四屋新田

四屋といふ所は下市場屬と大泉寺新田屬とあり

【附誌】【貝原好古曰】筑前と豊前との國界に小川を隔て田代村といふが二

つあり世俗は筑前田代豊前田代といふ又大和河内の國界にも小川を隔て

田原といふが二つあり是亦河内田原、大和田原と呼といへり【正生考】

四屋新田も是等に等し

出川村天今は清音 支村二 鴻ヶ崎 金ヶ口

地名正字也往昔は伊傳川と呼今は伊を去て天を清り【里老曰】此むらの中央平地の所より清水涌出て常に絶す田井の用水一村これに溢れて餘澤隣村におよぶ此故に出川の名ありといふ

松本村万通去聲○美濃に入たる葉栗郡に同名あり又愛知郡笠守の支に松本村あり

正字なり【松平君山曰】本國帳春日部郡從三位松原天神の所在をしらず按に原の字を毛止と訓すれば蓋し松本村の三所權現をいふ歟【正生考】今は諸大明神といふ社家を丹羽氏といふ近年物部神社などいふものは取がたし松原天神に近かるべし

神明村志清

地名今に考得ず

白山村

【箕浦賢屯曰】此村に白山の社あるより村名となりたることなるべし白山宮は圓福寺天台の扣にて文明十五年の記録に伊弉册尊菊理媛命大名持神の三座を養老二年より配祭れるよし見えたり【正生考】養老二年といふ事信がたし白山宮は凡一町程登る小山也一に觀音寺山ともいふ頗大社なり此村の東に方りて高森といふ山あり白山村に附有其北に大谷山あり高森よ

外原村 支村三 木付津湖 細野 榛之木

外原正字なるべし内津に對へたるもの歟

外原は東に國中第一の高山あり大谷山と呼て沖より船の目定にする山也といふ廻間の東に彌勒峰といふあり則廻間分なり其北に續きて少し低き山は支村細野の山なりといふ

【里老曰】此地秋より冬まで毎朝に必嵐ふく辰刻已前に風止ば其日雨降なり已刻過るまで嵐吹享せばその日清天なり是をもて一日の晴陰をしるといへり

【附言】伊勢國飯高郡に殿村といふあり是は殿は借字にて正字は外村の義也此村より西半里に平山を一越て岩内村あり言便に伊岩内、保知と云外村は相對なるべし

廻間村知多郡海東郡に同名あり 支村一 石龜池

地名正字なり此地山の間に良より坤へ長く引て凡二十町もあれば廻間と呼こと確然なり南の入口に小石あり半埋れたり相傳て云むかし明神の乘來り給ひし船也といふ【正生考】岩舟社は村の北の端にあり川を越て宮に至る

此宮に船岩はなし

【本國帳】春日部の郡正三位體借天神は在所をしらず謹考に此廻間村の宮をいふなるべし猶後の好士考訂すべし

庄名村

地名詳ならず或は塩名の轉聲歟【瀧川弘美曰】庄名とは庄の名といふ事やされば舊名は篠木村歟

上野村郡内にも同名あり

正字なり

一色村同名諸所にあはし

和泉、一色の二村を都て坂下宿と呼木曾路大井の驛へ出る下街道の宿次なり【里老曰】寛永二年源敬公の御時に初めてたつ其頃坂下新町と名付たまひ土貢を免したまへりその證文伊藤氏にあり此故に今も家別に除地ありといふ

東側は泉村なり西側は一色村の民たはしといふ

和泉村 支村二 林 本郷

【箕浦賢屯曰】此村の東なる森の際より水の出る所あり此故に村の名に呼な

るべし水勢は出川村の方よりも却て強し【正生考】此泉より東の田中に板一株あり其木下よりも湧出るなりされども是は水勢はそく弱し

本郷といふ所此村の舊地也今は却て支村に成たり

神屋村 支村四 川端 本郷 上神屋 下神屋

神安屋と三字に書たるを中を省きて書有なるべし加安屋と呼地世上にありかぎやとは鍵形の谷をいふにや

【貞觀熟田記に】日本武尊東征して歸給ふ時此處に至て假殿を營て休たまへり故に其所を號て神屋といふ時俗訛て加安屋といふといへるは信がたし

【考證】いせの山田を假名に陽万田と書を省略して陽田と書而有を和名類聚抄に比奈多と誤るより猶後人ヤウ田と呼大神宮義式解にもひなたは志州小濱村の北なる小島を漁人は日當島と呼るは是なるべしなど取く沙汰せるも非言なり後世の物ながらも音頭節にいせのやうだの一かざりと唄へるは伊勢の山田の言便なり

攝津國兔原郡にいま遠明村あり此處に兔原處女の塚あり遠明は遠刀明の省字より誤るなるべしと上田秋成がいへり

村神社あり祭神大名持命なり土民は彌勒の社ともいふ此地上古の神屋の跡

といふ

大棟梁の社あり祭神倭武尊なり社傳に村神を日本武尊といひ大棟梁を大己貴命といへるは左右反の違なり應仁以來斯有事まゝ多し

【附言】三河國寶飯郡今白鳥村に惣社大明神熱田大明神大頭龍の祠と三社あり里人いはく惣社は御伊勢様大頭龍は龍神也といふ【正生考】是は一笑するに堪たり惣社はとまれ斯まれ大頭龍は正字大棟梁なる事を得しらの社人が龍神など云散せる誤より遂に亦別に熱田大神の一區を副たるものなるべし

明知村

地名未考蓋し正字朱土の約るもの歟つちの反知なり後人猶訂すべし美濃國惠那郡にも同國加兒郡にも三河國加茂郡菊田村の隣にも明知村あり同郡舉呂母の西にあるは字音にミヤウチと呼也こは同郡なれば呼わかんが爲なるべし【真觀熱田記に】倭武尊東征の時内津より越給ふ時に此處にて夜は既に明たり故其地を呼て明知といふ又此處より少く行給ひて假殿を營りて休給ふ其所を號て神屋といふなどいへるものは取がたし

西尾村

名物 梅實

西は音を借たるなり佐以遠は佐田利岡の約るなるべしゆりの反い佐由利は單百合花のことなり萬葉に佐由利と詠るも佐は發語なりとぞ此處も山百合の多くある岡をいふにや或は又崎尾より轉り來る歟内津山の尾崎に當ればなり

【附言】三河國碧海郡なる西尾は正字なり遠江國豊田郡西川は俗説に犀川のよしをいへど予は又佐由利草川の義なるべしとおぼゆ

内津村

地名正字なるべし内を宇津と呼は内谷内宮内海の類なりつは物の集るをいへり津の字の漢意にはあらず内津は外原と對ていふ歟【真觀熱田記云】倭武尊東夷を平定て建稻種命と道を異て上り給ふに上毛野信濃三野の國を経て尾張路に向たまひ篠城に到歴て御食を進召の間、建稻種命の僕從久米の八腹といふ者馳來て告て曰我主駿河の國に在いて海中の覺賀鳥を捕むとて小舟に棹さし出て過て海に沈み亡没給ひぬと武尊聞給ひ嘆息して現哉々々と詔しより其地を呼て宇津々といふ其縁也と見ゆ此次に明知と神屋村の別れあれど上に擧たれに言く【正生考】寛平の熱田縁記もこれに相同じ謹按に現哉々々の説恐くは隨ひが

たし風土記の格に文跡相似たりすべて風土記のたぐひは地名においては信
られぬ事多し口實といへども星霜を歴るうちに沿革あるべし

【延喜式】春日井郡内神社【本國帳】從三位内津天神
集説云内津神社は今の妙見宮とよぶ宮是なり

社 僧 妙 見 寺

【松平君山曰】祭神建稻種命也世俗内津妙見といふものは誤歟按に中古朝家
の詔命ありて諸所に明見寺を建らるゝ事あり浮屠氏本地垂迹の説をもて此
所にも妙見菩薩を混じ既に神佛相半せしが天正三年の災にかゝりて社記悉
く灰燼となりし後今は妙見寺といふ天台宗の寺となれり悲しむべしと申さ
れき

【附言】天野信景曰本朝にして西域の神をもて祠を立て祭るものは牛頭
天王、辨財天、吉祥天の社妙見堂の類是なり又漢土の神を以て祠を立て
祀るものは山王權現、赤山明神、新羅明神泰山府君等は也【増穂大和曰】
傳教の山王を祭るは大已貴、智證の新羅を祭るは素盞雄、弘法の丹生を
祭るは天照大神なり其僧其神名を顯にせざるも臨時の得手勝手ある事な
るべし

磐石山

戸は所なり世俗奥の院とよべり當社開闢の地なりといふ山頂の磐石指出た
る破間に小祠を建階梯を架て登りて拜む爰も亦建稻種命を祀るといふ此磐
石の上面に小き窟穴二三あり深様六七寸常に水あり海潮の満干にしたがひ
て増減ありといふまた諸人の腰より上の疾病ある者此水を濯ぎかくればた
ちまち平癒ぬといふ

【追考】内津はもと宇津豆と唱へし歟此處の東隣半里に三野國甘原村加見郡
ありされば宇は大なる義歟又は發聲にて津豆の語は詳ならねき半里許の山
嶺に宇津豆、津豆原と地脈を引たる事由縁なきにあらず思ひつさぬるまゝ
にしるして驚したくなり猶後人訂し定むべし

春日井郡下卷之終